

大谷大学の役割

——満之における近代化——

小 川 一 乗

今日は清沢満之先生の臘扇忌ということで、私のような者がお話をさせていただくということは、ちょっと分不相応でございます。私は清沢先生というお方の人物であるとか、あるいは、哲学、思想、あるいは、信心といったことについて専門的に学んできた者ではございませんので、そういった意味では、本当に清沢先生のお考えをどこまで私の内で咀嚼しているかということについては、ほとんど、自信がありません。学長という職をいただいた時に、清沢先生の「開校の辞」に始まる百年というものを、私なりにどう引き受けていくかという、大谷大学人としての自己確認ということがそこにあるわけです。

私は去年四月から学長になりましたが、この「近代化百周年」という言い方は、これはもう既に、私が学長になった時は決まっております。近代化百周年とは一体何ぞやということ、私なりにきちつと確認しなければならぬということがあったわけです。

まず第一に、その近代化という言葉がどうしてもひっかかりました。というのは、私だけではなく、実は去年ある新聞の記者が取材に來まして、「近代化百周年という今回の記念行事の言い方だが、現在において近代化というのは決して良い意味で使われていない方が多いんじゃないか」と。「批判的な意味で近代化という言葉が使われている場

合が多いんじゃないだろうか」と。「それなのに、何故敢えて、近代化という言葉を使っているのか」という質問がありました。これには色々な理解の仕方があるかと思いますが、真宗学というか、宗学というか、そういう所で言えば、江戸までの伝統宗学を近代化していくという意味でも考えられるわけです。それで学長として目を通さなければいけないと言ったら語弊があるかもしれませんが、清沢先生に関わる物を管見させていただきました。すると清沢先生の近代化というのは、欧米の近代主義が怒濤の如く日本に流れ込んできた、その近代化と悪戦苦闘して真向かいに向かいながら、それを乗り越えていく仏道を見出していったと。そういう清沢先生の方向性が、少し私なりに確認できたのです。そういう意味では、近代化というのは単に古い宗学を越える、近代化するという、そういうレベルの話ではなしに、欧米の近代主義批判、それが基本にあるということではなからうかと。そういう意味で、近代化百周年という言葉の意味を、私なりに了解しまして、そういうことを申し上げましたら、「ヒューマニズム批判」ということで新聞のなかで大きく取り上げられたということがあるわけです。ヒューマニズム批判ということは、非常に重たい問題を含んでいるんですが、そういう中で、清沢先生と私との一つの出会いと申しましょうか、そういうことがあったわけです。ですから、私と清沢先生の間にある言葉は「近代化」だと、こう言っていいかと思います。

それで、今日は「大谷大学の役割」ということなんですが、この近代化百周年を迎えるにあたっての大きな事業である響流館が竣工しました。それを含めて、大変な多くの金額が要る。そういうことで、同窓会の諸君に、是非母校のために御寄附をいただきたいということで、昨年と今年の夏に全国をまわりました。ただ、寄附をお願いするだけでは元気がでませんので、何故寄附をお願いしなければならないのかということで、昨年は「二十一世紀に向かつて、今、人間を考える」というテーマの下で、大谷大学の役割ということをお話しました。すると大変多くの方が「そういう意味か、そういうことなのか」ということで、自画自賛で恐縮ですけども、「今までよく分からなかった。どうしてあのような大きなものを建てるのか。沢山のお金を使ってもつたいないじゃないか。といったレベルでしたか

解していなかったけれども、講演を聞いて、胸に痞えていたものがスカッと落ちた。全てが腑に落ちた」と言って、御寄附に心から協力していただく方がどんどん増えてきたということがありました。それから今年は、「今、人間を問う。孤立から連帯へ」というテーマでお話をしました。大谷大学の同窓会には七十八の支部がありますが、去年はそのうちの六十支部まわりました。講演の回数にすると五十七回、同じこと五十七回も話をしてまいりました。それから今年も、もう一度今年も来てほしいという依頼のあつた所を含めて二十五ヶ所の支部をまわりました。そのなかで、大谷大学の役割というものを、私なりに少しお話をしてきましたので、今日は、そのことを申しまして、それが仏教ということの上はどう成り立っているのかということについて、時間がある限りお話をしていきたいと思うことです。

今度、近代化百周年の大きな事業として、『大谷大学百年史』ができ上がりましたので、それを見ていただいたらいいんですけれども、今日そのことについて非常に大雑把に申し上げますと、大谷大学はそもそも宗門の後継者育成ということが始まりました。寛文五年、今から三百三十六年前と言われておりますが、それから明治の時代になりまして、欧米の、いわゆる学問研究の最高学府としての大学というものを日本につくるという方向がどんどん進んでいきます。

そういつたなかで、明治十年に東京大学ができます。そういつたことにつきましての、事柄については、『傳統と創造』の第九巻に、久木幸男先生が「三層の光彩―真宗大学開校の意義」という講題で御講演をされましたのが収録されています。それを見ますと、東京大学というのは、当時、国家の官僚を育成することが大きな役割であつて、その他に学問の研究者、いわゆる学者を養成する。それから明治時代にどんどん新しい学校ができ、つくられていく。その学校の設立者と申しましようか、教育者というものを育成するということがあつた。しかし、ほとんどは官僚の育成だったということです。

清沢先生は、その東京大学に入られまして、いわゆる、官僚を目指したわけではなくて、やはりヨーロッパの哲学を学ぶことを通して、ヨーロッパの近代化の基本にある人間の知性というものを、積極的に学んでいくという方向にあったのではないかと思います。そのあと、清沢先生は、京都の府立中学校の校長さんに請われてなるわけです。二十歳代です。ですから、そこから彼は教育者の道に入っていくわけです。京都府立の中学校の初代校長になりますが、後に、府立の中学校が府立でやっていけなくなつて、東本願寺に譲り渡すということがありまして、それが今の大谷高等学校です。ですから、大谷高等学校の校長室に行きますと、初代校長として清沢先生のお写真が掲げられております。そういった意味で、大谷大学の学長になる前に、すでに清沢先生は二十歳代で大谷高等学校の初代校長さんになつておられるわけです。

それから東京大学の開校ですが、いわゆる文部省の帝国大学令ができるのはその八年後なんです。大学令ができる前に東京大学はスタートしているわけです。明治十八年に帝国大学令ができます。そして大学令ができた後に一番最初にできた帝国大学が、明治三十年の京都大学なのです。そういった流れのなかで、大学としての高いレベル、学問的なレベルを高めていかなければならないという時代の流れがあるわけですが、その中で、大谷派の江戸時代から続いております学寮を、真宗大学寮と表明したのが明治十五年です。自らの学寮に大学という名を付けたのが明治十五年なんです。寮がまたついていますから、そういう意味では学寮という宗門子弟のための大学という範囲だったと言えます。

それから明治二十九年、清沢先生が東京の巢鴨に新しく校舎を設ける五年前ですが、校名から寮をなくして真宗大学となります。これには宗門の後継者育成という学寮と、大学とを分離していくという方向性があるんだと思います。ですから、真宗大学という寮という字をはずした名のは明治二十九年なんです。

久木先生の講演によると、それまでの間で大学という学問のレベルをもった学校を目指して、大学と名のつたのは

明治二十三年の慶應義塾だけなんです。慶應義塾が今の私立大学としては一番最初に大学と名のついているわけです。ですからそういう意味では、大谷大学の前身であります真宗大学は、大学という学問レベルを目指して大学と名のつたという意味においては二番目の大学だということになると久木先生は言っておられます。大体その頃の帝国大学令による東京大学と京都大学以外は、いわゆる各種学校ということで、欧米の法律であるとか、語学であるとか、医学であるとかといったことについての近代化の波をもるにうけて、政府のために役立つ、そういう人材育成を引き受けていこうとする方向にあったわけです。

例えば、同志社大学は、同志社英学校と言っているんです。同志社大学という名のりは真宗大学より後になるわけです。それからおもしろいと思いますのは、法政大学は法律の学校で、東京法学校と。それから明治大学は明治法律学校と。そういうように大学とは名のつていないんです。それから、早稲田は東京専門学校と。それから東洋大学は哲学館です。慶応大学は最初は蘭学塾と。そういったような各種学校の名称であったわけです。

そうしますと自らを大学と名のつた真宗大学としては、明治二十九年に逆上ることができませんけれども、このように大学としては二番目であるというようなことが、久木先生の講演の中で述べられております。それで、清沢先生の思想の変化というのを見ていった時に、明治三十四年（一九〇一）に開校の辞が述べられます。東京の巢鴨に真宗大学が、新しく校舎を建てて開校されるわけですが、明治三十四年と申しますと、その一年半余り後に清沢先生がお亡くなりになるということですから、あの開校の辞というのは先生の最晩年の自らの信念を吐露している。そういう時期のものであると言えます。そこに先生のお考えが結集されて、やはり欧米の近代化に対する批判というものが明確に示されているのではないかということを思うわけです。先生は明治時代の人ですから、最初はやはり近代化という言葉には輝いて見えたのではないんでしょうか。そういった中で、今までの日本のようなのは駄目だ、これからは欧米の近代化の中にこそ人間の幸せがあると、最初は当然考えておられたと思います。それが仏教とか宗門の関係とか、

いろいろな経緯を通して、最終的には「絶対他力の大道」というところまでいきついたのではないかと思えます。

それでは、今日はこれから、大谷大学の役割ということで、同窓会の支部総会でいろんなことを申してきたものの中から少し取り出してお話をしていきたいと思えます。

先程の拝読文のなかで開校の辞の一説が引かれております。

本学は他の学校とは異なりまして宗教学校なること、殊に仏教の中に於いて浄土真宗の学場であります。

（『全集』八・三五四）

と、こういう言葉が先程拝読されましたが、このところが私は一番大事な表現ではないかと思っております。この中で明治三十四年に「他の学校」と言っているんです。「他の大学」とは言っていないんです。「他の大学」といったら東京大学と京都大学しかありませんから、そうではなくて、他の学校とは異なると。「他の学校」というのは今申しましたように、慶應義塾を筆頭とするいわゆる明治国家に役立つ人材を育成する各種の専門学校です。早く日本を近代化しなければいけない、国に役立つ人材育成をするということで、英学校であるとか、法律学校であるとかといったあたり方で、政府との今でいうと官学一体となった教育体制の中に他の学校があったわけです。そういう学校とは異なるということ、清沢先生は言っておられるのです。

それで、どのように異なるのだろうかということを見ていきますと、やはり一番最初に目の中に入り込んだきたのが、先生の精神主義という言葉とその文章です。そこには、いわゆる西洋文明の合理主義と言ってもいいでしょうか。要するに実学主義と言ってもいいでしょうか。そういうものに対峙する精神主義ということが示されている。これが他の学校とは異なるということの基本であるということがすぐわかりました。そしてその精神主義の中に、そういう明治国家の方向性、科学的な合理主義に基づく近代化が持っているものに対する、先生の危惧というのが端的に表現されているのが、

恰も浮雲の上に立ちて技芸を演ぜんとするもの、如し

〔全集〕六・二〇

という喩えです。近代化を追い求めている他の学校とは異なるんだと。国家にひたすらに追随している他の学校とは異なるのであると読み取れます。そしてそれが「宗教学校なること」となっています。清沢先生にとつて宗教学校というのは真宗、親鸞聖人によつて明らかにされた真宗ということ以外にはないわけですから、その開校の辞の中にありますように、自己の信念の確立であるとか、自信教人信の誠をつくす人物を養成するとか、そういったような言葉に表現されている、そのことのために学び、そのことを教える真宗の大学であるということは、明瞭に窺い知ることができるわけです。そういう大学として真宗大学はスタートしたのです。清沢先生によつてそういうことが確認されて再出発をしたのであるということが明らかだろうと思います。

ところが、全国を回つてまいりまして感じたことの一つは、やはり清沢先生の仏教というのはいわゆる近代主義だということ、近代化を肯定した教えだと誤解している人が結構多いのでびっくりしました。そうじゃないのです。しかし近代化という欧米の大きな波から逃げるわけにはいきません。避けて通るわけにはいきません。最初はそれに立ち向かつてきちんと学んでいかなければいけません。その上で近代化の持っている闇と申しましょうか。伝統的な欧米の哲学の上での言い方をすれば、人間理性への信奉と申しましょうか。そういった人間の理性とか良識とかというものを絶対的に間違いの無いものだと言つて、それを信奉することを大前提とした欧米の近代主義といったものを持つている闇と申しましょうか。そういうことが、どんどん仏教の教えによつて明らかになっていくことがあるんだらうと思います。なぜなら仏教というのは、二五〇〇年前から人間の持つている理性とか良識がいかに多くの闇を持ち、どれだけ人間を不幸にしているかということを読み続けてきているのですから。そのような仏教的な視点が全くない世界で闇を光だと思つている、闇闇を明るいと思つていると言いましょうか。そういう逆転した中での近代化という姿が先生には明確に見えてきたわけです。

そういった、近代化の基本にある人間理性への信奉、そしてそれに基づくヒューマニズムというものを大雑把に振り返ってみますと、最初はヒューマニズムというものは、キリスト教の世界観であるとか、そういった宗教的な因習、束縛から人間が解放されなければならない。そういった宗教と自由の問題の中で、ルネッサンスと言うんですか、そういう運動の中から出てきた言葉だろうと思います。ルネッサンスとか、ヒューマニズムなどと言いますと、昨日、ご講演頂きました井上ひさしさんからもお叱りを受けます。横文字はあまり使うな、大和言葉で話さないということを書いておられましたので、もうあまり使いたくありませんけれども、それが、その後に今度は宗教ということではなくて、病気であるとか、貧困であるとかに苦悩する人間を解放していく、そのような意味で非常に大きな役割を果たしてきたのが、このヒューマニズムです。かつてはヒューマニズムという言葉は、日本語に訳されたときは「人道主義」と訳された。これは、結構いい意味だと思います。ところがその後、十九世紀の終わりになりますと、ニーチェが「神は死んだ」と言います。結局人間というのは、病気になることが少なくなり、少しずつ解放され、少しずつ豊かになっていく。それまではごく限られた貴族だけが豊かな生活をして、ほとんどの人たちは貧しい生活を強いられていた市民たちが、少しずつ生活が豊かになっていく。どんどん物質的に豊かになっていくと、やっぱり人間は錯覚を始めるわけです。神が上にいるのが邪魔になるわけです。人間が神の上になろうとするわけです。これは後から話しますが、日本人もその錯覚に陥ったのです。そういう時代の流れの中で、端的にニーチェは、「神は死んだ」と言った。

「神は死んだ」という言葉の意味は色々あるらしいです。また「神は死んだ」という言葉は、一ヶ所にあるのではなく、あちらこちらでニーチェは言っているそうです。意味は、神様がいなくなって良かったという意味で、これから人間は何でもできる、最高だと喜んだ意味と聞いているけれども、どうもそうではないのでしょうか。神がいなくなって人間の墮落が始まる、人間の破滅が始まるということを嘆いた言葉ではなからうかと思えます。私は

哲学者ではありませんから、勝手にそう了解しているんですが、その結果、二十世紀になって、正しく人間は自我の欲するままに快適な生活を送る権利があるということで、ヒューマニズムを遂行していく。その頃になってくると、ヒューマニズムという言葉は、日本語に訳される時は人道主義とは言わなくなり、「人間中心主義」というような訳がつけられていく。ヒューマニズムという言葉は一緒でも、時代と共に自身は変化していくわけです。最近ヒューマニズムを人道主義と訳す人はほとんどいない。ヒューマニズムは人間中心主義という訳になっていく。そういうのが二十世紀後半です。

そうすると二十世紀のヒューマニズムとは一体何なのか。これは端的に二十世紀は資本主義の競争原理の中で、勝つか、負けるかという競争社会をつくりだしているわけですから、競争に勝った者が自立して生きられるわけです。そういう意味で、経済的に競争に勝った者が、誰にも迷惑をかけずに自立して生きられるというように、経済的な豊かさとかさと合わせて個の確立、自立する個というのが、表裏一体となって出て来ているのではないかと思います。哲学だけで考えると、自立する個と言うと、いかにも素晴らしい事のように説明されていますけれど、裏はやはりその経済的な豊かさというものにタイアップしてはななろうかということが言えます。貧しかったら自立なんかできません。お互いに何とか助け合って生きなかつたら、生きられません。経済的に豊かになるという中で、自立ということが強調されていくような、経済性と合体して自立という考え方が出てきたのではないか。だから二十世紀のヒューマニズムというのは勝った者が負かした者をいたわるといって、そういう構造になります。

例えば、私の三十代ぐらいの時のアメリカ映画を見ますと、ジョン・ウエインが主演で、第二次大戦がある、ドイツ兵とバンバンやる、これは歴史的事実ですから、必ずアメリカが勝ちます。そして勝ったアメリカ兵が負かしたドイツ兵の陣地に入り込んでいくと、負傷して苦しんでいるドイツ兵がいる。そうすると、衛生兵を呼んで手当てをさせる。その時に美しいバックグラウンドの音楽が流れてくる。戦争して負かした、傷つけた敵兵の手当てをする。

これが大体二十世紀、競争社会におけるヒューマニズムと、こう言っていると思います。

最近は大ランティアが盛んです。豊かな者が貧しい者を助けるんだと。これが二十世紀のヒューマニズムです。だからヒューマニズムは敗者である負けた者とか、貧しい者の上には無いんです。そういうヒューマニズムなんです。負けた者とか、貧しい者はヒューマニズムを受ける側なんです。勝った者と豊かな者がヒューマニズムを受ける構造なんです。人間を完全に二分するわけです。勝った者と負けた者、豊かな者と貧しい者。そういった差別の構図の中で、現在のヒューマニズムがある。世界レベルの視野で、そういう構図になっています。しかし、このヒューマニズムの構図は一つの限界を持っています。負かした相手が自分より強くなることは絶対に認めないわけです。これが一つの競争社会のヒューマニズムの基本だと思っています。豊かなものが貧しいものの援助をするけれども、貧しい者が自分達よりも豊かになることは絶対に認めないわけです。それを認めたらその時は自分たちが敗者になるわけです。だから、そういう構図の中で二十世紀のヒューマニズムは生き続けてきた。

そういう流れの中で、今度二十一世紀はどうなっていくかというところ、人間の自我の欲望を果てしなく助長していくのがヒューマニズムである、そういう構図になっていくだろうと思います。その構図は既に端的に表れています。例えば、私が長い間関わってきました脳死による臓器移植。これはヒューマニズムです。臓器の提供を受けなければ、例えば、心臓なら心臓の移植を受けなければ長生きできない人に、心臓を提供する。人間同士助け合う、ヒューマニズムです。しかしこれはちよつとおかしい、そこには大きな問題があるということ、なかなか言いづらかった。仏教の立場から見たらこれは絶対に認められません。けれどもヒューマニズムに私達は汚染されていますから、心臓の移植をしたら相手が助かるんだからいいじゃないかと言われたら、それは違うんだとなかなか言えないんです。だからそれは少数派です。そこには大変な闇があるんだということ、言っても通用しない。ところが最近、クローン人間の話がありました。どうしても子供がつかれない夫婦にクローンの子供をつくと。これもヒューマニズムです。

人間として快適な生活を送る権利があるのだから、その中で、私は子供と一緒に快適な生活を送りたい。しかし私達はどうしても子供をつくれぬ。生めない事情にある。それならクローンの子供をつくってあげましょうとなる。これはやはり人助けです。ヒューマニズムです。そこまでいくとさすがに喧喧囂囂になりました。医学者同士が大論争している状況です。しかし、日本やアメリカの一部では、クローン人間に関わる研究は禁止しましたけれども、禁止しない国はあるわけです。ですから禁止しない国で、これからクローン人間はどんどんつくられていくだろうと思います。それもヒューマニズムです。子供のできない人にクローンの子供をつくる。そういう形で、科学がどんどん発達していく中で、人間に役立つもの、役立たないもの、都合のいいもの、都合の悪いものという分化の中で、ヒューマニズムは人間の欲望を果てしなく助長していくという方向性を取らざるをえない、こういう状況になっているんじゃないかと思えます。

そういうヒューマニズムに対して、私達はこれまではそれには限界があると言ってきたわけです。しかし、これからはヒューマニズムは極めて危険であると言わなければならぬ、そういう時代を今迎えているのではないかと思えます。人間が、あくまでも人間として在り続けていくことを不明瞭にし、不確かなものにしていく。臓器移植は、これからどんどん進んで、一人の人間が同じ臓器を何度も入れ替えることができる時代がくる。あるいは複数の臓器を一人の人間に移植することができる。それも簡単にこれからできるようになるでしょう。そうすると、いわゆる人間のロボット化がどんどん進んでいきます。それから遺伝子操作によって、人間の品種改良が行われていく。人工的な品種改良が行われていく。そういうこともこれからどんどん進んでいくでしょう。当面は治らない病気を治すという形で、遺伝子操作が行われるでしょう。これは誰も反対できません。しかし治らない病気を治せるといふことは何でもできる。老化も防ぐことができるでしょう。あるいは皆が美男美女になることもできるでしょう。皆が美声の持ち主になることもできるでしょう。そういうようなことが当然できるようになるわけです。治らない病気を治すことが

できるようになると、次に当然そういうことが求められていきます。そういう意味で、今度は人間の人工的な品種改良というのが進んでいく。それも全部快適な生活を送る権利があるという欲望のままに、そういう非常に危険なことがどんどん進んでいく。そういう近未来の時代状況がもう見えてくるわけです。このように未来の世界を見ていきます時に、これからの社会において仏教は一体どんな役割を果たすことができるのだろうか。今はあまりにも無力であるとしか言いようがありません。

しかし、これから、私はそろそろ出番が回ってきたなということを感じるので。二十世紀の前半は戦争に明け暮れました。戦争というのは結果的には、快適な生活を送る権利があるということで、相手を侵略して相手の物資を持つてきて豊かになっていくという話です。二十世紀の後半はお金に目がくらんで、経済的に豊かになったら人間は幸せになれるんだという経済至上主義で、仏教の出番は無かったです。念仏の話なんて、仏教の話なんて、何の利益にもならない。金の話が大事だとなるわけです。これは人間の本性です。だから命よりもお金が大事だというのが二十世紀の後半から、ずっと続いてきているわけです。これは決して人事じゃないんです。私たちも、私自身も、やっぱりそういう中で生活をエンジョイしてきた。そういうことがあります。絶対になくてはならないものは忘れてしまつて、無いよりあった方がいいっていうお金にばかり目を向けてきたわけです。しかし、そのことによつて、その破綻が見え出した。経済的に豊かになって快適な生活をしたという夢が実現したために行き詰つて、特にアメリカや日本の人間は滅茶苦茶になっていくことがあります。

昨日も井上ひさしさんがお話していたように、日本はアメリカと同じ状況をつくりだしている。人間として生まれて命を終えていく中で、人間の人生で一番厄介なことは何ですか。子育てと、年を取つた親の面倒を見るということです。これは大変です。子供を一人前に育てるということは大変な苦勞です。放つておいても健康に育ってくれたらいいですけども、どんな病気にかかるかわからない。どんな厄介な問題が起こるかわからない。また、年を取つた親

の面倒を見るというのも大変です。しかし、日本は経済的繁栄を求めあまりに、そういう人間として一番手間暇がかかることはもうしなくてもいい、これは国が面倒を見る、これが福祉国家であると簡単にそうなるわけです。人間がもっとも愛情を込めて、手間暇かけて、時には腹を立てたりしながらやっていかなければならない、そういう一番手間暇かかることはもうしなくていい、それは国に任せなさいということになります。そうして幼稚園、保育所、老人ホームなどがたくさんできたわけです。

そして、もうすでにそういう状況が五十年以上続いてきたので、今の親は子供を育てる能力が無くなってしまった。子供を育てる知恵を失ってしまったから、最近は幼児虐待がどんどん増えています。どうしていいかわからないわけです。そういうような状況をつくりだしています。そういった中で、人々はお金ができることによってどんどん孤立化していきます。一人で生きていきますから、どんどん孤立化していきます。そして家庭は空洞化していきます。私はそういう恐ろしい現状の中に身を置いている。だから私はこれから精神を強く持つて孤独に耐えて生きる力を持たなければいけないのです。私は自信がありません。孤独に耐えていく高潔な精神力を持たないと生きていけない。しかし孤独に耐えて生きていける人間というのはどれほどいるんでしょうか。ほとんどの人はそうはいかんと思いますが。そういった中で、孤独に耐えて生きる社会を、私達に要請されてきている。そして子供は親の面倒を見なくていいという、親は子供の世話にはならないという。子供には子供の、大切な人生があるからその邪魔はしたくないとは見事な論理だけれども、これは人間破壊の論理です。親子がお互いに世話にならないでどうするんでしょうか。しかしそんなことやったら福祉国家になれない。親子のネチネチした、そんな関係ではいけない。それは遅れた社会である。そうなったわけです。

そして今、戦後五十六年経ってみますと、私達は見事に経済的繁栄の中で、教育までもが、全てがそこに集約されていく。かつては子供に添い寝をしてはいけないとか、子供は早く自立させないといけないとか、それは見事な論理

に見えましたが、これはあくまでも経済的繁栄を最優先した中で出てきた理念に過ぎないのです。早く自立させないと自分が働くのに邪魔になりますから、自立させなければいけないことになるわけです。しかし人間として、親は子を育て、そのために大切な時間を割き、時には自分の生活を犠牲にする。子は老いた親のために自分の生活を割き、時には自分の生活を犠牲にする。これはもう極めて当然のことなんです。それをしてはいけないという社会をつくったわけです。そんなことをしていたら経済的繁栄はできません。発展はできない、遅れた社会なんだと。くだいようですけれども、私たちは福祉国家を夢みたという中で、何か大事な物を失ってしまつて、その中で今いるんな事件が起こっているということはもう明らかです。基本はその一点だけだろうと思います。そういった社会を、近代化という流れの中でずつと突き進んできて、これからもヒューマニズムという名において、どんどん進んでいくことになるだろうと思います。

そういう社会の動向に対して私は今こそ、仏教が必要とされている時代ではないかということをおもうのです。どういふことかと申しますと、いろんな学問を勉強されておられる方にもきちんと知つておいて頂きたいのは、仏教という思想の基本は何なのかということなんです。それは、皆さんがたはもうすでにご存知と思いますが、今から二五〇〇年前のインドにおいて、釈尊によつて仏教が始まりましたけれど、その時のインドはどういう状況かと言うと、いわゆる業報による輪廻転生、自分の行いの報いを受けて生まれ変わり、死に変わりを繰り返すという生命観が基本にあつたわけです。命は輪廻の中で永遠に死と生を繰り返していくんだという生命観が常識としてあつたわけです。それは一面において非常に優れた教えです。現在のインド人でもそれを信じている人が多いのです。この間、NHKのドキュメントで「大沐浴」という、インドのヒンドゥー教の宗教行事が放映されておりましたけれど、やはり現代人も、同じことを昔からの伝統的な言い方で説明しています。NHKのインタビュウを受けて、「どうしてあなたは苦勞して、このガンジス川まで来て、沐浴をするんですか」「体を清めて神に祈るのである」「何と祈るのですか」と尋

ねると、これはワンパターンな言い方なんですけど、「死んで、牛に生まれ変わればつながれて生きなければならぬ。鳥に生まれ変われば弓矢で射られる。薔薇に生まれ変われば摘み取られる。やはり人間に生まれ変わりたい。だからこのつらい旅をして、沐浴をして、身を清め、神にそれを祈るのである」と答えるのです。そういうことを現代人でも言っているわけです。二五〇〇年前にそういう生命観ができていたわけです。当時の宗教家は、その輪廻の世界からどのようにして、解放されていくかを模索しました。それを、ヴィモークシャ、解脱という。輪廻の世界からどのようにして解放されていくかを一所懸命に模索したのが当時の宗教家なのです。ところが釈尊だけは、違っていたのです。

今日も感話に縁起という言葉が出てきましたが、縁起ということは仏教の最初ではないのです。もっと根底があるわけです。釈尊は、他の宗教家と何が違ったのかというと、仏伝という釈尊の生まれてから亡くなるまでの一生の物語があります。これを仏伝文学というのです。これは文学ですから、フィクションが多いですが、その中で出家の動機である四門出遊の物語が有名です。釈尊の住んでおられたお城、カピラ城には四つの門があったという、私も大谷大学において、仏教入門の講義を持たなければならなくなった、若い時は必ず仏伝についての講義をしました。仏伝というものの説明をしなければいけない。その時に四門出遊の物語をする。ある時、釈尊は身をやつして東の門からお城の外へ出かけたなら、年寄りに出会った。杖をついてよほよほ歩いている。「あれは何者だ」「年寄りです」「私になるのか」「王子様も、人間ですから、お年寄りになります」と。次は南の門から出て、道端で苦しんでいる病人に出会った。「あれは一体何をやっているのか」「病気で苦しんでいます」「私もなるのか」「王子様といえども、人間ですから、時にはあのような苦しみを受けなければならぬ」。それから西の門から出たら、死骸に出会った。私が最初にインドに行った頃には、カルカッタとか、オールドデリーなんか行きますと、死骸が転がっていましたから、びっくりしました。その周りに人がいて、火葬にしたいが、薪代が無いと言う。早く焼いてあげなさいと言って薪代を

あげた。次の日通つたらまた同じことをやっているわけです。もう乾燥してカラカラになってましたけれど、死骸で商売しているわけです。何とも言えないおおらかな世界です。だから二五〇〇年前には、そんな死骸があちこちにあったのだらうと思います。それを見て、釈尊はびつくりするんです。「私もなるのか」「人間ですから、王子様もあのようになります」。そうしたら、お城に立ち戻って部屋に閉じこもってしまった。

それから最後に北の門から出て、今度は沙門に出会った。沙門というのは「努力する人」という意味で、当時の宗教界において新しく現れた遊行者達です。今から二五〇〇年前のインドは、文化も非常に発達しまして、豊かな時代を迎えています。そういつた中で、インド各地に輪廻転生の世界から、どのようにしたら抜け出すことができるかという教えを説いている説法者が各地に現れたわけです。その教えを訪ね歩く人たちが現われ始めるわけです。そして教えを聞き、森林の静かなところで、静かにその教えを自分なりに考える、瞑想にふける。そしてまた、他の地方に有名な出家者がいると聞くと、またそこに行つて、その話を聞く。そして思索をするという、そういうようにして遊行して歩く人達が出てきたわけです。それを沙門というのです。その沙門に出会うわけです。そして釈尊はその沙門の綺麗に澄んだ眼差しに、感動して沙門として出家するという物語なのです。

これで老・病・死という三つの苦しみと、その苦しみからの解放を求める沙門との出会いが、出家の動機だということになってます。しかしこの四門出遊の物語には、大事な点が見失われているのです。それは、輪廻転生の世界です。生苦、生まれることの苦しみが欠けているのです。後の仏教の教理では、生老病死の四苦という基本がくずれ、生まれたから老病死の三苦があるとされるようになります。生まれることは苦ではなく、苦の原因となってしまうのです。そのため生苦の説明ができなくなり、生苦とは生きることの苦しみとか、人生苦と解釈されますが、それは誤りなのです。生苦は生まれること自体が、苦しみであるということなのです。釈尊がお城の外で見たのは、お城の中では絶対に見えなかったものを見たのです。それは何かと言いますと、お城を一步外に出たら、生まれたこと

自体が苦しみとしか言えない奴隷やら、低いカーストの人達が、うようよしていたということです。そして、生まれたこと自体が苦しみであり、そしてその中で、老い、病いを得て、惨めに死んでいく。そういう人生を送る人の姿を見たのです。そして人々から足げにされ、唾吐きかけられ、お前は過去に悪いことをしたからそのような生苦になったのだといって軽蔑され、惨めに生老病死を送っていく人がいっぱいいたということなんです。生老病死の四苦とは、そのような惨めな四苦という厳しい現実を見据えた中から説かれているのです。その時に釈尊は、彼らの命と、城の中で裕福に暮らしている自分の命にどんな違いがあるのかと。これは人間がつくりだした差別でしかない。これが釈尊の直覚なんです。これに釈尊はびつくりしたのです。本当に地を這うようにして暗い世界で生きていく。少しでも努力して、人間らしい生き方をしようとするれば、頭が高いとぶんどられる。そういう生き方しかできなかった人達が、城の外には、たくさんいたということです。これは、お城の中で見られなかった姿です。これに釈尊は大きなショックを受けたんだろうと思います。そのへんのが四門出遊では、ちよつときれいになってしまっているということがあろうかと思いますが、そこで釈尊は、生きとし生ける者の命は全て平等でなければならぬと直覚したのです。これが仏教の基本なんです。

ですから、「一切衆生」という言葉は仏教にしかない言葉です。「全ての生きとし生けるもの」という表現は仏教しかないんです。これはキリスト教にはありません。それから勿論ヒンドゥー教にもありません。そういう生きとし生けるものの命は全て平等であるという平等思想は仏教しかないのです。宗教であればどの宗教でも命の平等を説いているわけではないのです。仏教以外の宗教は命の差別を前提としています。これは明らかなことです。そういうのが釈尊の一つの特徴なんです。ですから、釈尊の涅槃図を見ましても周りを囲んで泣いているのは人間だけじゃありません。動物も泣いている。蛇も泣いている。鳥も泣いている。そういう命への、あらゆる生きとし生ける命への平等であるという眼差し、これは仏教しかないんです。ですから命は尊いといっても、命の差別を前提としている宗教に

おいて尊いと言うのと、仏教において尊いと言うのとは、全然意味が違うんです。ここのとこをきちっと押さえておけばいけません。命の平等思想に立って命は尊いと言った時に、「天上天下唯我独尊」という、全ての命の尊さを前提として、わが命尊しと言いついていく世界がある。そういう命の平等性の上に命は尊いと言うのと、命に差別を設けた上で命を尊いと言うのは全然違うんです。キリスト教で命は尊いと言ってもその意味が違います。尊い命と尊くない命を分けるということです。これは、生命倫理についての欧米の論文を読んだらすぐわかります。尊い命と尊くない命の線をどこで引くかとか、どちらの命が尊いかという発想なのです。どちらの命が尊いかということ自体がもう比べていることでしょう。そういう中で命の尊さということ、仏教での命の尊さは全く違うんだということをはつきりとしとかなければいけない。

ところで生きとし生けるものの命は、全て平等であるということ、これは釈尊の直覚ですから理屈がないのです。道理がないのです。それで釈尊は苦勞された。そしてそこで発見された道理が、「縁起の道理」なんです。ですから、釈尊がお悟りを開くその夜に、「初夜、中夜、後夜にわたって、縁起の道理をもって繰り返し繰り返し観察された」という有名な言葉があります。それは自分が発見した縁起の道理によって、「命は平等」という直覚に間違いがないだろうかということを一所懸命観察されたわけです。命は平等であるという眼差しを、直覚を、道理として説明するために発見されたのが縁起の道理なんです。ですから、最初から縁起の道理があったわけではないんです。最初にあったのは、命は平等という釈尊の直覚であつたわけです。

さて彼が発見した縁起の道理ですが、これは言うまでもなく無量無数と言っていいほどの因縁によって、ただ今の私の瞬間がありえているという教えです。だから私達は自分で選んで人間となつたわけではない。みんな、例外なく無量無数の因縁がただ今の存在となっている。縁起の縁というのは無量無数の因縁を表します。起というのは起こっているということです。縁起という漢訳は非常にいい漢訳です。無量無数の因縁によって、存在しているという意味

だったら、縁存でもいいんです。縁存でもいいんです。しかし、これは縁起でなければいけないんです。起というのは瞬間の存在です。永続的に存在するのは起と言いません。縁起の起というのは瞬間に起こっていることを表そうとしたダイナミックな字なんです。そういう意味で、縁起という漢訳はすごくいい漢字なんです。無量無数の因縁によつてただ今のこの瞬間が起こっているという意味なんです。それは一瞬にして消えていくものである。一瞬、一瞬が起こっている、そういう意味で起なんです。ですから、縁起でなければならぬのであって、縁存ではだめなんです。あるいは縁在でもだめです。そういうのが釈尊の縁起の道理なんです。

チンパンジーであつても、無量無数の因縁によつてチンパンジーとして今起こっている。そういう命のあり方において全ての命は平等なのです。これは、例えば、去年でしたでしょうか、ヒトゲノムという人間を構成する遺伝子の羅列がほとんど解明されたというようないふことがありました。三十億字によつて、置き換えられていくような遺伝子が解明された。朝日新聞に学者の意見が出てまして、それを読んでおりましたら面白かったのは、チンパンジーと人間の遺伝子がどれだけ違うと思ひますか。相当違うと思ひませんか。ところが、九十九パーセント近くが一緒なんだそうです。たった一パーセント余りの違いなんです。一パーセント余りの違いで、あちらはチンパンジーになり、こちら人間となつてゐる。そうすると、遺伝子という極めて具体的な生物学的なあり方において、一パーセント余りしか違わないのに、ちよつと知性があるからといつて、五十パーセントも違うような偉そうな顔をして人間は威張つてゐる。これが傲慢と言われないでなんと言つたらいいんでしょうか。傲慢になつてゐる。遺伝子の中身からも、人間の知性というものがいかに傲慢であるかということが見えてきます。それがどれだけ人を傷つけ、人を軽蔑し、人を痛めつけてゐるかということが見えてきます。たった一パーセント余りしか違わないことが、きちんと遺伝子の上で生物学的にわかつたわけですから、もつと謙虚にお互いに肩を組んで歩けないのでしょうか。それを理性が邪魔してなかなかできません。

そういうことを思います時に、チンパンジーとか、モンキーの研究をしている河合雅雄さんのように、同じ命を生きていくという眼差しを持つことを、私たちはどこかで失ってしまっている、そういったことを教えられます。そういうようなことで、私達は無量無数と言っていいほどの因縁によってただ今の瞬間がありえているということです。

しかも私は今ここで、お話させてもらっている、この瞬間しか私は存在していないんです。そうすると、この瞬間が無量無数の因縁によって成り立っているわけですから、今ここでお話をさせてもらっている瞬間を成り立たしめているのは、皆さん方です。皆さん方が誰もいなかったら、お話をしません。つまらん話だなんて皆さんが眠ってしまったら、私は、お話をやめます。皆さん方が聞いて下さっているから、今私が話している。しかもこの瞬間しか私は生きていないんです。そのことを思ったら、皆さん方が輝いてくる、光ってくる。この私の瞬間は皆さん方がいるからありえている。皆さん方がいなかったら、私のこの瞬間はありえていない。この瞬間を深く深く自分の上にいただいていいたら、皆さん方が光ってくる。ありがとうとしか言いようがない。この瞬間の私を、今皆さん方が生かさせてくれている。そういうのが縁起ということなのです。

ですからよく、仏教と道徳がドッキングしまして、例えば、一隅を照らすと言うでしょう。努力して立派な人間になつて一隅を照らす人間になれと。それはそれでいいですが、それはどうも仏教の基本ではないようです。それは道徳なんです。仏教は照らされることに目覚めていくということなんです。自分が照らしてなんかいません。照らされている自分をいただいていくということでしょうか。それが縁起ということなんです。私が照らすのではなく、皆さんによって私が照らされている。皆さんによって今、私という存在が喜びに満ちて、光り輝く世界の中に身を置いている、そういうあり方が縁起ということなのです。照らすのではなくて、照らされたということが見えてくる、それが、仏教の基本なわけです。そこに仏教におけるさとりがあり、そこに同時に仏教のすくいがあるわけです。そういうことをきちんと表現したのが大乘の菩薩たちです。大乘の菩薩たちは、無量無数の因縁によって、ただ

今の私が成り立っているという道理を、ガンジス川の砂の数を超えるほどの諸仏たちが私となっていると、こういっていただけたわけです。自分が光っているのではない、自分が光に出会っているのだ、だから私を私たらしめているのは私ではないんだ、仏たちなんだ、諸仏なんだ、こういうふうにいただいたわけです。これは信心の世界と云っているのでしょうか。無量無数の因縁によって、この私が成り立っているというのは、道理の世界です。その縁起の道理の説法を聞いた大乘の菩薩たちは、無量無数のガンジス川の砂の数を超えるほどの諸仏たちが、今の私となってくださっているといいただいているわけです。断っておきますが、今のこの瞬間、照らされている自分を強く感じます。しかし何時でもではないのです。しかし、大乘の菩薩たちは、いかなる時でも、照らされている、自分に都合の悪い瞬間にあってもそこに光を見ているのが菩薩なのです。そこに私と菩薩の大きな違いがあるわけです。

ですから、『阿弥陀経』の六方段で、東南西北上下にガンジス川の砂の数を超えるほどの諸仏がいると説かれている、ああそうかという話ではないのです。諸仏たちがいて、阿弥陀仏を讃嘆している。それは何のためか。それはやはり諸仏たちが、今の私たち一人一人となっている。そういう命の世界が見えてきた時に經典の密意が見えてくるのです。理屈ではないのです。諸仏たちが今の私となっている。そういう、ただ今の瞬間瞬間の命をみな平等に生きているのである。そういう命の平等観というものを持っている仏教の教えによって、命を選別し、使えるものと使えないもの、役に立つものと役に立たないもの、都合のいいものと都合の悪いものに分ける合理主義、つまりあらゆるものを選別し、分断し、富める者と貧しい者、勝つた者と負けた者という世界を繰り返し繰り返し、つくりあげていくような考え方を基本からノーと言っていく、それはおかしいと問いかけていくことが今こそ必要となってきたという、そういう時代が現代ではないかと思えます。

そういたしますと、清沢先生は、そういう合理主義に立った近代主義に対する危惧と申しましょうか、危うさ、もろさ、それを最終的に絶対他力の大道というところで越えていかれたということがあります。それから、清沢先生の

書かれたものは注意して読んでいくと、ほとんど仏教用語の読み換えであることがわかります。だから清沢先生のものを読む時は、仏教を勉強してもらわないと困ります。明治のあの時代に、仏教を一般の通用語としてどう表現したらいいかというご苦労が、そこににじみ出ている様に見えます。ですから、清沢先生のお言葉というのは、全部その裏に仏教のテクニカルチームがある、用語がある。最初からそう思っただけなら面白いと思います。

私は山口益先生という、私より十代前の、第十五代目の学長をされた先生の、不肖の弟子なんですけれども、最晩年の弟子というのはいいです。かわいがつてもらいまして、公私共にお世話になったのですが、この先生の書かれた論文はまず日本語として読めない。皆さん方は山口先生の『般若思想史』という名著を読んだことがあるでしょう。あれは私たちの時代の仏教概論を本にしたものです。あれがまともに読める人は、まずいないと思います。あれは日本語ではないんです。あれは全部サンスクリットに換えることができます。だからサンスクリットを念頭に置いて読んでいたら、よく意味がわかる文章なのです。ある意味で、清沢先生のももそういうところがあるんじゃないかと思えます。先生の文章を仏教の言葉で、もう一度裏を押さえていくと、ああ、このことかということが分かります。もちろん御専門に勉強されている方は、そんなことはすぐお分かりだと思えますが。お若い方はそのような先入観で、そこに隠されている仏教用語は何かということ、注意しながら読まれたらよいと思います。清沢先生はそうとう仏教を勉強されておりますから。

そういう意味で、清沢先生は光り輝く近代化の波をもろに受けて、その中で学び、そして光が闇に見えてきた。決して光っているのではない。その光の裏に暗い人間の理性の闇を見た。だからそういう御時世に対して本学はなくてはならない大学なんだということが、開校の辞で明確に示された。そして百年経った今、私たちはその精神を受け継ぐと共に、その近代主義が、なおさらヒューマニズムという美名においてそれがいいことだ、素晴らしいことだという方向で、どんどん進められてきたが、そういう方向の中で、そこに人間の破壊、滅亡を読み取っていく必要がある

ます。そういうことができるのは、共に生き合うという、仏教の命は平等という教えです。他の命に対する眼差しを失った差別の世界では、人間は滅んでいくしかない。共に生き合う命の連帯性をお互いに確認しあっていく。そういうことがこれから非常に大事な時代になる。私が今ここでお話をさせてもらっているのは、皆さんがおられるからです。これはものすごい連帯でしょう。私たちが意識するとしなないと関わらず、いかなる場面においても連帯なくして生きていないんです。それを勝手に一人で生きて行けるなんて錯覚するところに大きな間違いがある。私と皆さん方は連帯して今の瞬間の吐く息、吸う息をいただいているのです。皆さんがこれからどんな場面においてもお互いに連帯しているのです。そういう共に生き合う命の連帯性ということの中に、私は人間の理性が持っている闇を打ち破っていく、大きな力が秘められているのではないかと思います。

そういうことを、難しい言葉で言えば本願力と言います。そういうものが私たちの中に今、命の連帯の中の只中に身を置いているという、その瞬間の命への眼差しを持った時、照らされていることに気づくのです。皆さんによって、私は今皆さんの光の中で只今のこの瞬間をいただいている。そういう世界が、共有できていったらいいのではないかと思います。

アメリカは同時多発テロ事件で泥沼化しています。あの事件が起こって、報復とは言っていないけれども、テロの犯人を捜すんだと言っているけれども、私はそれは詭弁にしか見えません。やられたらやるといって、そういう一つの社会です。そして私は、ちょっと我慢ならないのは、キリスト教会が何やっているのかということです。この中でキリスト教徒の人がおられたらたいへん恐縮なんですけれど、ミサばかりやっているんです。亡くなった人を悼み、追悼する。これはヒューマニズムです。それはやって悪いとは言いません。しかし、それだけで、そこからは神の言葉が聞こえてこないのです。キリスト教会は人間に奉仕しているわけです。人間に奉仕する教会になっっているわけです。しかし本来のキリスト教会は違うはずです。神に人間が奉仕することを求めるのがキリスト教会ではないでしょうか。

逆転しているんです。人間に奉仕する教会、非常に強い言葉で言えば、ヒューマニズムの宗教になっているわけです。そうではない。キリスト教会は神に奉仕することを人間に求めるのが本筋ではないんです。例えば皆さん方も周知されている、キリストの言葉はどうでしょうか。例えば、今度のテロ事件に関わっているものであれば、「汝の敵を愛せよ」ではないでしょうか。「右の頬を打たれたら左の頬を差し出せ」、これが神の言葉でしょう。「剣をもって相手を滅ぼす者は、剣をもって滅ぼされる」、これも神の言葉です。この神の言葉という形で表現されている、宗教的真理を何故説かないんでしょうか。それを説いたからどうなるというわけではないかも知れません。しかし神の言葉はこれなんだということを何故明確に言わないのか。そういつたことが気になります。あるいは、どこかで言っているのかも知れませんが、それを報道関係が取り上げていないのかも知れませんが、本来キリスト教の教会であれば、そこを強調していく、神の言葉を強調していく、人間の持っている過ちを指摘していく。真の宗教であるならばそういうことがなくてはならないはずなんです。そういう言葉を私は見失っているように見受けられますけれども、それは私たち仏教の教えに生きている者も、もしかしたら見失っているかも知れません。ヒューマニズムの中に、私たちも埋没している。そういうことを自戒として考えざるをえないと思うことです。時間が過ぎてしまいましたけれども、以上のようなことを、これから社会に向かって発信していくのが、「大谷大学の役割」なのです。この最後の一言で、今日のお話を終わらせていただきたいと思います。